



Title	近代日本の靴下繕い : 20世紀前半の新聞記事を中心とした分析
Author(s)	はしもと, さゆり
Citation	デザイン理論. 2025, 86, p. 58-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102494
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近代日本の靴下繕い

20世紀前半の新聞記事を中心とした分析

はしもと さゆり 奈良女子大学大学院在学

はじめに

東日本大震災後のボランティアとして宮城に向かう夜行バスの中で、筆者は初めて自分の靴下を繕った。その継ぎ跡はボコボコして不完全ではあったが「自分の手でモノを直すことができた」ことにとっても驚き、大事なことが起こったことを直感して、その試行錯誤を続けるようになった（幸い定期的に靴下には穴が空いた）。津波で何もかもさらわれてしまった沿岸地域に通っていたこと、原発事故後の混乱した空気が日本中を覆うような時代、加えて東京では若年単身女性として心細く一人暮らしをしている中で、靴下に手を入れて針を持ち、自分の衣服を修繕する、無心で運針をしている時間はとても落ち着くことができた。一方、祖母など身内からは「みっともない」と言われたり、友人からは「えらいね」と言われたり、様々な反応があった。またある時、「昔は電球を入れて繕っていた」と声をかけられた。昔は当たり前には繕っていたという共通認識があることに行き当たる。今とは違いなぜ靴下を繕っていたのか。これが本研究のスタートとなる小さな問いであった。

近代日本と靴下繕い

坂田信正の『靴下の歴史』によると、日本において靴下は南蛮貿易の時代に伝来したというのが定説で、江戸時代には下級武士が内職として手編みで生産していたとされる。明治時代になると洋装化の中で靴と靴下の着用が必要となり、1871年洋靴工場を経営する実業家の西村勝三が東京、築地に工場を設置し、輸入した数台の機械で生産を

始めたのが靴下工業の始まりであった。靴下は革靴と共に天皇や軍人、役人、警察官や鉄道員のほか、制服を着用する学生にも着用が広がり、大正時代にゴム靴ができ靴が普及すると、児童にも履かれるようになる。一方、家庭内において女性の洋装が一般化するの戦後であり、それ以前の靴下は子どもや学生、男性が外で着用する品であった。先行研究では、大丸弘、高橋晴子が「洋服の時代になってから大変だったのは靴下の繕いだった」とし、「靴下継ぎは母親や女中の、日課のような夜なべ仕事になった」とも述べている。

調査資料について

このように日本で靴下が普及、定着する明治時代から現代までを通して検証できる資料として新聞を選定、過去150年に渡る「靴下繕い」に関する記事の調査から、20世紀前半に集中してそれらの記事が掲載されていることが明らかになった。朝日新聞の1901年から1950年の紙面において、手入れや再利用を含む靴下繕いに関する記事は54件確認された。そのうちの94パーセント（51/54件）が十五年戦争下に集中し、さらにそれらのうち40パーセント（20/51件）が太平洋戦争開始後、1941年12月から43年12月の僅か2年間に掲載されていた。以下では、近代日本でもっとも靴下繕いが盛んであったであろう戦時下の様子を三つの時期と事例に沿ってみてゆく。

衣料の科学化とスフ靴下

1937年、軍用資源確保のため毛製品、綿製品に

スフ（ステープル・ファイバー）の混用使用が定められ、同年11月から純毛靴下、12月から純綿靴下が製造禁止になる。代わりに登場したのがスフ靴下であったが、スフは木材パルプを原料とした合成繊維で、水に濡れると破れるという性質を持っていたため、弱いスフ靴下には苦情が相次ぐようになり、それに対し新聞では正しい洗濯法で乗り切るような記事が度々紹介される。1940年5月の「戦時生活心得集 弱い足袋と靴下」という記事では日本女子大学教授、上田柳子の指導により「スフ靴下の補強法位心得て置かなければ此時代の主婦とは云へません」「靴下は毎日洗濯する事。汚れが染み込むと破れ易くなります」と述べられ、家族の靴下が主婦の入念な洗濯、補強により管理されることが当然視される様子がわかる。

衣料の切符制と靴下繕いの盛り上がり

1942年には衣料切符制が始まるが靴下は品目と数量を限定した制限小切符の対象となり年6足と限定される。この頃の紙面では、図1のような靴下の更生法、修繕法が続けざまに紹介される。

また方法のみならず、日常生活の中でどのように靴下繕いに迅速に対応してゆくかの心得、百貨店で更生法の指導が行われていたことや靴下つぎ器が販売されていたことなどがこの頃の紙面で確

認できる。年6足に限定された靴下の欠乏に対する対応策はそれを作るのではなく、古いものをほどこき、縫い合わせ、細かく運針してゆく繕いであり、そのプロセス自体が必要とされていた。

プロパガンダ「間に合わせ運動」と靴下繕い

1943年には、大政翼賛会が新調見合わせの「間に合わせ運動」を提唱する。これに対し朝日新聞家庭部では読者からの実例募集を行い、それを元にしたコーナーを継続的に掲載、靴下に関する記事も4件確認された。この中には穴が空いた靴下は上下を逆さまにして再度履き「靴下は一年三足で十分事足ります」とする投稿が見られるなど、現代からすれば極端ともとれる例も見られる。プロパガンダについての先行研究で大塚英志は、戦時下に無数の標語が作られそれが投稿によって支えられたことを指摘したが、ここでも同様に靴下の間に合わせを投稿することによって読者が動員される様子が見える。靴下は、家庭の女性が子や夫のそれを繕う、わかりやすい例としても有効に働き、誰にでもできる小さな技術によって、生活が戦時生活に書き換えられる様子が伺える。

おわりに

女性が家族のために時間と労力を重ねる靴下繕いは戦争協力の強い装置として働き、懸命に実施されメディアを通して喧伝される。その証拠に、戦後になると同様の記事は見当たらなくなるが、他方で同記事に登場した指導者の多くは戦後も高等教育における家政科教育者として、また洋裁家や手芸家として活躍し続ける。このことが示す影響については、今後の研究課題としたい。



図1 靴下の厚生法, 朝日新聞, 1942-03-04, 東京朝刊, p.4